



地球ギャラリー vol.24

Syria

[シリア]

文・写真=安田 菜津紀 (フォトジャーナリスト)

静かな 痛みの中で

6歳になるパン屋の孫娘は、シリアでの生活の方が長く、故郷イラクの記憶はほとんどないという



C



E



D

C.ジャラマナの繁華街入り口。ここで暮らすイラク人は4万人近いともいわれている
 D.サムーンを焼くバグダッド出身の老人。イラクで若いころから営んでいたパン屋は、治安の悪化で手放したのだという
 E.店頭に並べられた焼き立てのサムーンは、あっという間に売れていった

街を一望できるカシオン山からの眺め。週末にはイラク人たちも、気晴らしに夕日を見にやって来る

シリア首都ダマスカス。かつて交易の中継地として栄えたこの街では、何世紀もの時を経た歴史ある建物や遺跡を至るところで目にする。

南へ車で15分、ジャラマナと呼ばれる小さな繁華街に着いた。住人のほとんどがキリスト教徒のこの町。イスラム教徒の安息日である金曜日にもかかわらず、活気にあふれている。商店街を進むとパンの香りが漂い始めた。店頭には並ぶサムーンと呼ばれるそのパンはイラクの伝統食だ。次々と集まってくるお客はイラク人。この店は彼らの憩いの場となっている。

ジャラマナには、2003年のイラク戦争以来、キリスト教徒であるために迫害を受け、シリアへ逃れてきたイラク難民たちが数多く暮らしている。ある店では、5人の娘を抱える母親が窮状を訴えていた。「掃除婦をしています。給料は3カ月も支払われていません。体力も限界です」。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によると、現在約180万人のイラク人が国外に逃れている。うち、シリア国内のイラク難民は100万人以上（シリア政府発表）。働くことを許されない彼ら。国連の支援を受けられなければ、イラクに戻るか、不法労働するしか道は残されていないのだ。それ故に、搾取の対象となることも少なくない。



B



A

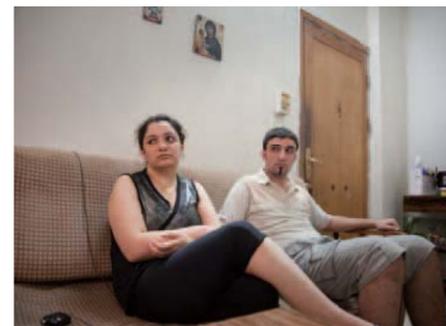
A. オールド・ダマスカスの路上では、チャイの売り子たちによく出くわす
 B. ダマスカスの中心にあるハミディア商店街。シルクロードが栄えていた時代の様相が今も残っている

H.アイシャが日々抱える不安を和らげるのは、末娘サリーの存在
I.アヤ(2)はバグダッドから逃れてきた両親のもと、シリアで生まれた。シリア滞在が長くなってしまった難民が、さらに難民を生んでいく



J.放課後、サリーの勉強を手伝うムハンマド(20)。こうしてイラク人同士が家族の枠を超えて支え合いながら、子どもたちを守っている
K.ムハンマドは17歳のときにシリアに逃れてきた。住まいの電気代は辛うじて支払えているが、水道は止められている。「死んでもいいから家族のいるイラクに戻りたい」とシリアでの生活のつらさを語る
L.ジャラマナの中心にある教会は、ここに暮らすイラク人が集うことのできる貴重な場だ

F.ハミディア商店街の近くでは、旧政権時代に使われていた三ツ星が入ったイラク国旗のたこが揚げられていた
G.イラクで起こった自爆攻撃のニュースを見るオマル(22)とファラ(25)のきょうだい。両親は難民申請が受理されてアメリカに飛んだが、彼らにはまだその兆しはない



3人の子どもを抱えるアイシャ(37)も、3年前にシリアにやって来た。貯金とUNHCRからの支援で生計を立てている。「夫は何者かに誘拐され、焼死体で発見されました。バグダッドはもはや、私たちがキリスト教徒が安心して暮らせる場所ではありません」。公立の学校に通う3人の子どもたちは、言葉の微妙な違いなどから孤立しがちだという。「長男のビサン(15)は父が亡くなったときの記憶で苦しみ、末っ子のサリー(6)はなぜ自分がここにいるのかさえ分かっていません。私自身は、この国で誰を信用していいのか、不安でいっぱいなのです」。何より彼らを追い詰めていたのは、コミュニティからの疎外感だった。

難民である彼らの多くは、シリアに定住するのではなく、シリアを経由し第三国へ移住したいと考えている。しかし07年までの3年間で第三国定住を果たしたのは、わずかに1万5000人。ほとんどのイラク難民があてのない生活を余儀なくされているのだ。

目に見える戦火には世界の関心が集まる。しかし、隣国で安全が得られる地への旅立ちを待ち続けている難民の静かな痛みには、なかなか光は当たらない。

開戦から7年がたち、米軍の撤退がささやかれるイラク。彼らの中ではまだ、戦争は終わっていない。

暑さが和らぐ夕方近くになると、ジャラマナの町にも子どもたちの笑い声が響き渡る





灌漑農業の普及活動の一環として、圃場の小型模型を使い、節水灌漑農業の重要性を農民に説明する農業普及員

シリア人電力技術者から火力発電設備の維持・管理方法の研修を受ける、イラク人研修員たち



灌漑利水に使用するパイプの仕組みを説明するJICA専門家(左から2人目)



JICAの活動 in シリア

水資源の管理と人材育成で中東地域の安定を

希少な水資源の管理と効果的な利用が課題となっているシリア。JICAは長年にわたり、同分野への協力に取り組んできた。また、難民の受け入れなどで、中東地域の平和と安定に重要な役割を果たす同国と共に、周辺国への支援も行っている。

近年は、平均4.5%と高い経済成長率を維持するシリアだが、人口増加率が約3%と高い上、イラク難民の流入や急激な都市化に伴い、水不足や環境汚染の進行に直面している。こうした問題の解決に向けて、JICAは主に、水資源の管理と効率的な利用、環境保全、経済基盤整備に加え、地域安定化の促進につながる人材育成支援を行っている。

一年を通じて降水量が少なく、水資源が季節的・地域的に偏在するシリアでは、水は貴重な資源。しかし、人口過多や都市化の影響から、水質汚染や水不足が深刻だ。また、国際河川であるチグリス川、ユーフラテス川を水源とするため、シリア国内での水使用量が、下流の近隣国にも大きく影響する。そこでJICAは、シリアの水消費量の約80%を占める農業分野で節水し、効率的な水

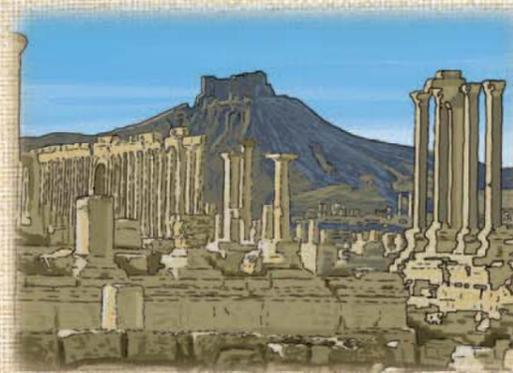
利用を促進する技術協力「節水灌漑農業普及プロジェクト」を2005年から実施。全国4県を対象に、JICA専門家による指導や国内外での研修を通じ、農業普及員や灌漑専門技術員の育成、モデル圃場の設置・運営、節水灌漑手法や教科書の普及体制構築などを支援している。

一方、中東地域の十字路に位置し、周辺諸国と政治的・経済的に深いつながりを持つことから、多くの難民を受け入れている同国。中東地域の安定化促進に向けて、JICAはイラクやアフガニスタン、パレスチナからの難民を対象に、シリア政府や国際機関と連携し人材育成支援を展開している。紛争による電力インフラの破壊と技術者の減少が原因で、需要の半分程度しか電気を供給できていないイラクに対しては、シリア電力

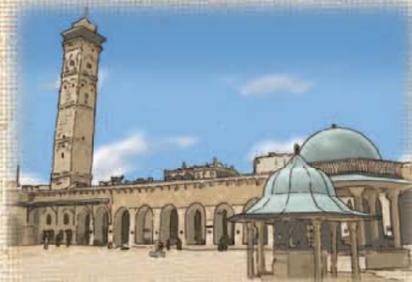
省と協働で「ジャンダール電力研修所」にイラク人研修員を招へい。火力発電所の設備機器の調整・修理・メンテナンス、工作機械の操作など、発電所の運営に必要な技術を伝えている。JICAはこうした支援を通じて、イラクの安定した生活環境づくりに貢献している。



小中学校の就学率96%に対し、通園率が18%と幼児教育が十分でない。青年海外協力隊員の情操教育支援を通して、豊かな人づくりを目指す



ローマ帝国時代のパルミラ遺跡ほか、5つの世界文化遺産を有する。



世界遺産のダマスカス旧市街に建つ「ウマイヤド・モスク」は世界最古のモスク。8世紀前半に建立された。



地球ギャラリー
Vol.24
Syria
シリア
Illustration / Hori Takao



農業は国内総生産の25%を占め、全労働人口の26%が従事。綿花、小麦、豆類、野菜などを生産。



首都：ダマスカス
面積：18.5万km²(日本の約半分)
人口：1,990万人(2007年)
公用語：アラビア語
宗教：イスラム教85%、キリスト教13%
1人当たり国民総所得(GNI)：1,760ドル(2007年)
経路：日本からの直行便はなく、ドバイ、ヨーロッパ、トルコ経由が一般的。
通貨：シリア・ポンド(SYP) 1SYP=約1.9円(2010年8月現在)
気候：地中海沿岸部の地中海性気候と、内陸部の砂漠性気候に分かれており、雨期(11~3月)、乾期(4~10月)がある。7~8月は30度以上と高温だが、12~2月は氷点下まで下がり、雪やみぞれが降ることもある。



古代から交易の地として栄え、「スーク(市場)」が国中で見られる。特に、北部の都市アレppoのスークは国内一大きく、活気にあふれる。



パルミラ
〒171-0014
東京都豊島区池袋2丁目58-8 TOビル2F
TEL: 03-3981-8293
URL: <http://www.palmyra-ib.com/>
17時~23時
定休日：毎月第1日曜日

- ☆最初にソースを作る際、分離しないようよく混ぜる。
1. ヨーグルト、水、小麦粉を合わせ、かき混ぜながら中火で沸騰させる。
 2. タマネギを黄色くなるまでいため、ひき肉を加え、塩、コンソウで味を付ける。肉が半生程度になったら火を止め、冷ましておく。
 3. 生地用の水、小麦粉を、耳たぶの硬さになるまでかき混ぜたら、10分ほど常温で置く。
 4. 生地を伸ばし、コップの口などでちょうどいい大きさに丸くくり抜き、具を包む。
 5. ソースを温め、ギョウザを入れて、約7分中火にかけたら完成。

シリア料理 ヨーグルトソースの水ギョウザ 「シュシュバラック」



朝食と夕食は軽めにとり、午後3時ごろに遅めの昼食をしつかり食べるのがシリアの食文化。朝と夜は野菜、昼は肉類を使ったおかずが一般的で、味付けは、トマト、ザクロ、ゴマ、ヨーグルトなどのソースがベースとなる。家庭ではナンやライスとともに、色鮮やかな料理が10種類以上食卓に並ぶ。

東京・池袋駅より徒歩8分の所にあるアラビア料理店「パルミラ」は、全国でも数少ないシリア料理中心のメニューがそろった。中東の美しい小物や装飾にあふれる店内は、つい日本であることを忘れてしまう。食事のほかにも、水たばこが体験でき、毎週水・金・土曜日にはベリダンズショーも開催される。

この店の人気の一品がヨーグルトソースの水ギョウザ「シュシュバラック」。濃厚なヨーグルトソースの独特の酸味に食欲をそそられ、ギョウザのはしも進む。パターライスとの相性が抜群の一皿。